

れほどいるだろうか。

高度経済成長期以降に顕著だった傾向のひとつに、自然科学的思考に対する傾倒があげられる。「タマヨビ」や「お迎え」の背後にある宗教的世界観は、看取りの場が生活の場から病院の中に移行してゆくにつれて、客観的証明もできず、リアリティも感じられない「怪しい話」や「迷信」として、全般的に価値が貶められていったのではなからうか。

しかし、面白いことに、「怪しい話」は、自然科学的思考のおかげで飛躍的に進歩した医療界の一角で、命脈を保っていたようだ。近年の出版物を見ても、「看取りの文化」の主な担い手は、人間らしい最期の実現を支えようと努力を重ねてきた、終末期医療の現場や老人福祉施設で働く専門職達なのではないかと思われる(國森康弘『いのちづく「みとりびと」』全四巻、農文協、二〇一二、村瀬孝生『看取りケアの作法』雲母書房、二〇一一等)。

現代韓国における自然葬の思想

田中 悟

本研究は、現代韓国における自然葬の位置づけを概観し、その歴史的な文脈と現代的な意味について考察を進めるものである。考察の手がかりとして、自然葬に関する韓国国内の研究を取り上げ、その議論の筋道を追うことで、韓国における自然葬をめぐる議論の主要論点を整理する。その上で、日本における自然葬の議論を参照しながら、自然葬の意味付けに関する韓国的な特性について考えていきたい。

本研究では、韓国の自然葬に関する先行研究として、特に以下の三本の論文を取り上げた。『韓国地籍情報学会誌』第一巻第一号(二〇〇九)に掲載されたチョドクヨン・イムイテク「大韓民国葬墓制度に関する研究」は、韓国葬墓文化の変遷過程を踏まえた上で、葬墓制度の現況と問題点を論じ、その改善案について論じた研究である。また、『浄土学研究』第一二輯(二〇〇九)に掲載された安佑煥「葬事文化の変化にともなう自然葬の研究」は、先のチョドクヨン・イムイテクの研究で論じられた葬墓文化の変遷の結果として登場し、注目されている自然葬を取り上げ、その定義と理論、また韓国における自然葬の現状と将来的な発展の方策について論じている。さらに、『保健福祉フォーラム』第一六七号(二〇一〇)に掲載されたキムギョンレ「墓地の価値に関する研究」は、墓地によって蚕食されている国土の価値の試算を試みた論考であり、墓地による国土の蚕食予防策の一つとして自然葬を位置づけるものである。「埋葬(土葬)文化から火葬文化へ」という韓国葬墓文化の変容を、墓地面積の拡大による国土の蚕食や、都市化・核家族化による墓の継承の困難、あるいは墓地不足・火葬場不足といった社会問題の観点から取り上げるこれらの先行研究において論じられる「自然葬」は、日本においてイメージされるそれとはかなりの違いを見せている。

その違いの核心は、「自然環境保護」という観点は優先されない、という点にある。現代韓国では、「国土の効率的な活用」と「死の空間の、生者の生活環境への編入」のため、自然葬のための場所はアクセスに便利でなおかつ快適な空間でなければ

ならず、時として「墓地の公共空間化」を意味する。それはつまり、大規模な造成工事や便宜施設(例えば進入路・駐車場・祭壇・トイレ・休憩施設など)の設置を伴うものとしてイメージされるのである。そのような自然葬地の「造成」を通じて、墓地による土地の占有という国土の価値毀損を阻止し、生者のための空間として土地を効率的に活用することが、韓国の「自然葬」論の主眼となっている。

すなわち、韓国の「自然葬」論は、土地の利用価値という側面における「国土の蚕食」や、墓地難といった政策的課題に対応する代案として、位置づけることができる。そのような「自然葬」論の特徴として指摘できるのは、墓地の価値を「ゼロ査定」し、葬礼や追慕といった文化的な面から論じられるべき「墓地そのものの効用」を論じない、という点である。韓国の「自然葬」論においては、「死者を葬る場」への個人個人の思い入れといった側面への関心を読み取ることは難しい。その意味で、韓国の自然葬は、宗教学のような人文科学ではなく、公共政策学や経済学といった社会科学の議論の対象となっていると言えよう。

そのような研究のトレンドに対して、日本の自然葬に関する金セツピョルのイデオロギー研究的な視点や、また韓国の納骨堂についてインタビューに基づく事例研究から丁ユリが描出して見せた儀礼や追慕の形式、あるいは新たな死と生の空間の生成といった視点をいかに織り込んでいくのか、といった点は、なお今後の課題として残されている。

戦没者慰霊の一考察

白山芳太郎

全国戦没者三一〇万人の慰霊を行う政府主催「全国戦没者追悼式」が、毎年八月一日に開催されている。同追悼式は昭和三八年に始まり、同五七年からは「戦没者を追悼し平和を祈念する日」の行事として開催されている。近年では同式典に、政府ならびに遺族ら約六千人が参列している。また遺骨収集などで海外や硫黄島(後述の沖縄は国立沖縄戦没者墓苑)などから帰還の戦没者遺骨を千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨(現在、約三六万柱)し、同墓苑納骨の遺骨に拝礼する「千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式」が厚労省主催で毎年五月、皇族臨席のもと、開催されている。海外や硫黄島などからの戦没者遺骨の帰還は昭和二七年から始まり、平成三年から旧ソ連抑留死亡者遺骨帰還、同六年からモンゴル抑留死亡者遺骨帰還が実施され、その結果、約三三万柱の遺骨が帰還。旧陸海軍や邦人引揚者の持ち帰った遺骨を含めると、海外戦没者約二四〇万柱の約半数(約一二七万柱)が帰還。ところで、昭和五九年六月、東京都千駄ヶ谷の修養団本部で開催された文部省補助事業婦人奉仕活動指針会議の席上、那覇市首里公民館から参加の社会教育指導員より「沖縄県民は、戦争が終結するといち早く遺骨収集に取り組んだが、三九年経過しても、沖縄の山野にまだご遺骨が眠っておられますので、ぜひ皆様にも収集奉仕をお願いします」(「修養団沖縄遺骨収集ボランティア第二三回実施報告書」とする動議が出され可決された。それにより修養団主催遺骨収集実施が計画された。昭和六一年、修養団第一回沖縄遺骨収集が実施され本年